

保育内容総論の研究（１）

－宍戸健夫の保育カリキュラム研究分析－

A Study of Introduction to Childcare and Education (1) -Analysis of the nursery school curriculum studies Takeo Sisido-

後藤 由美

清須市ネギヤ保育園

Yumi Goto

Aichi Mizuho Junior College

Abstract

The focus of this study is on “General Theory in Childcare and Education,” a subject introduced, with a crucial role to play, in the curricula for the education and training of nursery school and kindergarten teachers. The key objective of this study is to reconsider the theoretical foundations of this subject in approaching its progressive implementation.

Other subjects related to the content of childcare and education within the curricula for the education and training of nursery school and kindergarten teachers include, “Curriculum Theory in Kindergarten Education,” “Early Childhood Education Methods,” “Principles of Childcare and Education,” and “Principles of Early Childhood Education.” Therein, the subject most closely related to General Theory in Childcare and Education is “Curriculum Theory in Early Childhood Education.” However, to date, there has been little investigation into the content of General Theory in Childcare and Education at the syllabus level and few clear investigations into its ranking in relation to other subjects. Therefore, in this study, we engage in a structured theoretical inquiry into “General Theory in Childcare and Education” that can assist with general teaching in the field of childhood care and education. This paper reviews prior research into early childhood education curriculum studies in Japan and aims to elicit suggestions that will contribute to the conceptualization of General Theory in Childcare and Education

キーワード：幼児教育、保育内容総論、カリキュラム

Keywords: Early childhood education, General Theory in Childcare and Education, Curriculum

Ⅰ. 研究目的

1. 保育内容総論における現状課題

近年、子どもを取り巻く環境は大きく変化し、平成28年に中央教育審議会による幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等についての答申¹⁾では、グローバル化は我々社会の多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、子供たちの成長を支える教育の在り方も、新たな事態に直面していることは明らかなことであるとしている。これらの背景を踏ま

え、保育の計画が必要とされ、保育士養成では新たな「保育内容総論」が求められることは周知の通りである。既存の保育内容総論は、2009年（平成22年）「保育士養成課程等検討委員会」における「中間まとめ」では「保育内容」と「保育内容総論」と「保育内容演習」にわける。保育内容の全体的な構造や総体を理解した上で、養護と教育に関わる領域などについて学ぶことが必要であるため、総論と内容演習の教科目を設定するとされている。現在使用されている保育内容総論のテキストでは、柴崎らの「保育課程・教育課程総論」²⁾では、保育の基本と計画、指導計画の種類と役割、各年齢における計画の考え方、小学校における計画の関係、保育にお

ける計画の変遷、日案、週案の作成、教育課程の見直しなどが挙げられる。及川らの「保育内容総論」³⁾では、保育内容総論の意味、保育内容の歴史の変遷、保育内容と子どもの発達、保育内容における遊びの意義、保育内幼と環境、保育内容と子どもの生活、幼稚園教育要領、保育所保育指針と保育内容、保育内容におけるカリキュラム、保育内容の課題で構成されている。

これらの点から、保育内容総論では具体的に保育所保育指針、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領のねらいと内容を中心に、指導計画の立て方や各領域の捉え方、子どもの発達や遊びなど総合的に展開することを目的としているが、各年齢における指導計画に関する項目が多いことが分かる。

2. 保育カリキュラムにおける先駆的研究

保育カリキュラムが重要視され様々な研究がなされてきた。そこで、その中でも、保育実践や日本の保育史、保育カリキュラムの研究を先駆的に積み重ねてきた宍戸健夫の歴史的遺産にあたる研究は、「保育史」「保育制度、行財政」「教育計画、保育計画、指導計画」「乳児保育」「児童文学」など多岐にわたり、その功績は今の保育に生かされている。

3. 目的

そこで、本研究では、保育内容総論におけるカリキュラム研究の一環として、宍戸健夫の幼児教育研究における幼児教育分野での功績を整理し、分野ごとの文献リストを作成する。その中から代表的研究である保育カリキュラムにおける研究成果を整理、分析し、保育内容総論における内容構成の資源とすることを目的とする。

II. 研究方法

現在、使用されている保育内容総論におけるテキストを整理し、分析する。

今に至るまで、宍戸健夫が幼児教育分野でどのような研究を行ってきたか整理した。研究方法として、国立情報学研究所に登録されている論文、図書、雑誌を抽出し、178本に

も及ぶ膨大な文献を、日本保育学会によるキーワード①保育思想、保育倫理、保育史②保育制度、保育行財政③発達論、心身の発達④教育計画、保育計画、指導計画、評価⑤保育内容Ⅰ（保育内容総論、遊び）⑥保育内容Ⅱ（健康、人間関係、言葉、表現、環境）⑦保育方法（保育方法論、保育形態、幼児理解）⑧保育環境、保育教材⑨乳児保育（0，1歳児保育）⑩障害児、障害のある子どもを含む保育⑪児童文化、児童文化財⑫保育者の資質能力、保育者の専門職性⑬保育専門職の養成⑭家庭教育、家庭教育及び地域との交流、子育て支援⑮幼保の一元化、幼保小連携⑯多文化教育、異文化理解の16項目にその他の項目を追加し、17項目より文献に即してその特徴を明らかにした。その中から、教育計画、保育計画、指導計画、評価に関する研究に着目し研究リストを作成すると共に、代表的研究を取り上げ、歴史的経過及び研究内容の比較をし、宍戸健夫が構築した保育カリキュラム論を整理する。

III. 研究結果

1958年から現在に至るまで宍戸健夫が研究を行ってきた功績を分野ごとに分類し本数の合計を示した。(表1に示す。)

①保育思想、保育倫理、保育史では61本あり、戦後の保育や明治・大正・昭和における保育史について整理されている。子どもをとりまく時代背景に伴い、保育がどのように変化してきたのか、また、その時代ごとの課題を取り上げている。また、倉橋惣三における保育倫理、保育思想についての研究も挙げられ、日本の保育における海外の知識の影響や保育の基盤にあたる思想などが明記されている。④教育計画、保育計画、指導計画、評価では、26本あり幼児教育構造、就学前教育のカリキュラムの在り方、新幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂、保育カリキュラム、プロジェクト活動の位置づけなどが挙げられる。

⑤保育内容Ⅰ（保育内容総論、遊び）では、19本あり、親と保育者が保育のおもしろさを共有するには「父母と共につくる保育内容」や幼保一元化議論について検討されている。

表1. 宍戸健夫による研究論文リスト

分野	本数
①保育思想、保育倫理、保育史	61
②保育制度、保育行財政	5
③発達論、心身の発達	5
④教育計画、保育計画、指導計画、評価	26
⑤保育内容Ⅰ（保育内容総論、遊び）	19

⑥保育内容Ⅱ（健康、人間関係、言葉、表現、環境）	0
⑦保育方法（保育方法論、保育形態、幼児理解）	5
⑧保育環境、保育教材	0
⑨乳児保育（0，1歳児保育）	0
⑩障害児、障害のある子どもを含む保育	1
⑪児童文化、児童文化財	2
⑫保育者の資質能力、保育者の専門職性	0
⑬保育専門職の養成	1
⑭家庭教育、家庭教育及び地域との交流、子育て支援	4
⑮幼保の一元化、幼保小連携	2
⑯多文化教育、異文化理解	5
⑰その他	42

その中から、教育計画、保育計画、指導計画、評価に関する文献をリスト化し整理した。（表2に示す。）

表2．穴戸健夫による教育計画、保育計画、指導計画、評価に関する文献

	年	テーマ	出典
教育計画、 保育計画、 指導計画、 評価(26)	1960	青年教育再編成の基本的視点—中等教育	教育10(14)
	1961	明治後期における幼児教育構造についての一考察	愛知県立女子大学・愛知県立女子短期大学紀要
	1973	就学前教育のカリキュラムのあり方（「教育内容の改革」をめぐる問題をどう考えるか—日教組教育制度検討委員会第3次報告	国民教育(18)
	1997	日本の構造をどう捉えるか(3)〈日本教育学会第55回大会報告〉	教育學研究64(1)
	1999	新幼稚園教育要領を読み解く	保育情報(265)
	1999	保育所保育指針の改訂（案）について	保育情報(271)
	1999	解説新保育所保育指針—保育所保育指針の改訂で、どこがどうか変わったのか	保育情報(274)
	2000	幼稚園教育要領をめぐって	教育學研究67(1)
	2001	これからの保育カリキュラム研究の視点を探る(2)実践を土台にした保育カリキュラムの構造化を考える	日本保育学会大会研究論文集(54)
	2001	展望保育学の過去・現在・未来—保育カリキュラムを中心に（保育の歩み（その1））	保育学研究39(1)
	2002	保育の構造にプロジェクトをどう位置づけるのか:子ども	教育學研究69(1)

		の意思表明権に視点をあてて〈特集日本教育学研究第 60 回大会報告〉	
2002		保育のカリキュラムについての歴史的考察	保育の研究 (19)
2006		日本における保育カリキュラムの誕生	同朋大学論叢 (90)
2007		改定「保育所保育指針」中間報告（素案）について	保育情報 (371)
2007		特別講座伝え合い保育の現在（特集第 4 6 回全国保育問題研究集会・報告）	季刊保育問題研究 (227)
2007		改定「保育所保育指針」（中間報告を考える）（特集幼稚園教育要領と保育所保育指針の改定の論点をさぐる）	季刊保育問題研究 (228)
2008		新幼稚園教育要領の改定点とその問題点	保育情報 (379)
2008		「協同的学び」とは何か：幼児教育におけるプロジェクト活動の可能性を考える	保育学研究 46 (2)
2010		和光幼稚園の保育 その歴史的な意義について（和光大学ワークショップ幼児期に育てたい力幼小接続問題と和光鶴川幼稚園の保育）	和光大学現代人間学部紀要 (3)
2010		保育カリキュラム（保育過程）について考えるー保育カリキュラムの構想	保育の研究 (23)
2011		保育実践のまなざしー戦後保育実践記録の 60 年」	人間教育の探求 (23)
2012		誘導保育、日本の自然教育と生活課題について	幼児教育史研究 7
2012		保育実践史の中のプロジェクト・メソッド	幼児教育史研究 7
2015		保育とは何かを考える：新制度の実施にあたって	季刊保育問題研究 (271)
2016		保育構造論から見る保育計画：プロジェクト活動を考える	季刊保育問題研究 (277)
2017		特集対談 あらためて「課業」を考える	季刊保育問題研究 (285)

IV. 教育計画、保育計画、指導計画、評価における代表的研究

矢野健夫による教育計画、保育計画、指導計画、評価を特徴とする代表的研究を分析する。

1. 保育カリキュラムの研究課題について

1-1. 保育の研究第 23 号

「保育カリキュラム(保育課程)について考える」⁴⁾

エンゲルダールは保育カリキュラムを考えると、大切なのは「子どもの見方」である⁵⁾とのべ、「教師は、子どもの 100 の言葉に耳を傾け、思い込みを排して、子どもとコミュニケーションを取らなければなりません。それは、子ども達が議論し、相談し、批判することをどのように学んでいるのかということにも関係しています。最終的な目標は、事実をやり過しているのではなく、意味の共同的創造です。学ぶことは、プロセスであり、テーマをもってプロジェクトに取り組

んでいる時が最も学んでいる状態に達しているといえます。このような子どもの見方は、教師に共同研究者 (co-researcher) であり、構 (constructor) としての教育士 (pedagogue) という新たな役割を与えています」⁶⁾ この提案に、私たちの保育カリキュラムを構築する上でどう考えたらよいかを探っている。矢野は、日本のカリキュラムの型 (タイプ) を 3 つのタイプとし、環境構成型 (あるいは自由遊び型)、設定保育型 (あるいはねらい達成の領域型)、プロジェクト型 (主題・探求型) とし、この 3 つの型を活かした保育カリキュラムの構想を目指した。その結果、環境構成型、設定保育型に付け加えてプロジェクト型の 3 つの顔 (型) を持っているが、そのどれかにとらわれようとするのではなく、保育カリキュラムの全体構造を構想しようとしたものであるとした。そして、矢野は、保育カリキュラム論は、保育実践を通してどう生かすかによってよりよいものになり、科学的に

なっていくのだと言っている。

1－2. 「保育構造論からみる保育計画」⁷⁾

ここでは、「保育計画」をどう把握したらよいのか、そこで「保育計画」(保育カリキュラム)をどう考えるのかをテーマに「保育計画」からはじめて、「保育構造」を考えプロジェクト活動をどう位置づけるのかを検討している。

矢戸は、まとめとして以下のように示している。

- ①各活動が連動し合う保育活動であること。
- ②「話し合い」子どもの相互の理解を深め、活動を連動させる鍵であること。
- ③一人一人が集団生活の中で輝いていること
- ④父母との連携を大切にすること

これらの点が、これからの保育計画(保育カリキュラム)にとって重要だと述べている。

1－3. 「日本における保育カリキュラム」⁸⁾

日本における保育カリキュラムで矢戸は「保育の質・教育の質を規定するのは、保育条件であることは言うまでもないが、同時に保育カリキュラムの問題でもある」とし「保育カリキュラムは、子ども一人ひとりが、その生活や発達に即して、将来にむけて健やかに成長することを願い、とりくむ、保育活動の全体的な計画である。」⁹⁾としている。具体的内容として①教育基本法の「教育の目的」や学校教育法にある幼稚園の「目的」「目標」などをふまえて、どういう子どもに育てたいのかという保育目的・目標がある。②子ども一人ひとりを自立させるために基本的生活習慣を養うことについての配慮がなされている。③子どもの主要な活動である遊びがどのように位置づけられ、その充実にむけてどのように計画されているかが、わかるものでなければならない。④子どもの興味をひくような遊具、教材、教具がどれだけ用意されており、それらが子どものからだ、ことば、造形など基礎的な知識・技能を伸ばすために作成されている。⑤年間を通して行事、飼育、栽培、園外保育などプロジェクト活動が子ども達との「話し合い」のもとに計画され、それらが一定の教育効果をあげていることを目指している。⑥子ども達の基礎的な生活習慣が自立するだけでなく、集団生活において、クラス運営上の自治的活動(仕事)が組織され、社会的能力の基礎を形成しようとしている。⑦保育者と子ども、子どもと子ども相互の「話し合い」「伝え合い」がたえずおこなわれ、相互理解のもと、人間関係が豊かに発展させられ、その中で、一人ひとりの社会性が育てられようとしている。⑧保育実践が記録され、それが保育者集団によって討議され、評価され、保育計画が見直され、保育実践の質を向上しようとしている。⑨保育実践の結果にもとづく、新しい保育カリキュラムの編成が保育者集団の民主的な話し合いで進められている。⑩保育カリキュラムについての理解と協力をえるための父母たちとの連絡・交流や会合が計画されているとことを提案してい

る。

また、日本の保育カリキュラムとその発展について、歴史的な経過とその課題が明らかになっている。

V. 日本における保育カリキュラムの歴史的研究

1－1. 倉橋惣三の保育カリキュラム研究の成果と特徴

1. 系統的保育案

系統的保育案とは、倉橋惣三を中心とする東京女子高等師範学校附属幼稚園の教師たちが作り上げた「系統的保育案の実際」(1935年、昭和10年)である。

1884年同校附属幼稚園規則では、保育内容として20の「課」(課題)を定めている。⁷⁾「会集」「修身ノ話」「庶物ノ話」「木ノ積立テ」「板排へ」「箸排へ」「鑑排へ」「豆細工」「珠繋ギ」「紙織リ」「紙摺ミ」「紙刺シ」「縫取り」「紙剪リ」「画キ方」「数へ方」「読ミ方」「書キ方」「唱歌」「遊嬉」の「保育課」である。これらのうち、「木ノ積立テ」「板排へ」「箸排へ」「鑑排へ」「豆細工」「珠繋ギ」「紙織リ」「紙摺ミ」「紙刺シ」「縫取り」「紙剪リ」「画キ方」は当時恩物とされていたフレーベル主義の教具である。しかし、このような「恩物」中心の保育カリキュラムはフレーベルの精神に反するものとして明治20年から30年にかけて批判され、1989年(明治32年)の「幼稚園保育及設備規定」では「保育ノ項目」を「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の4項目とし、「恩物」は手技という名称の中に含み込まれた。こうした動きの中で、東京女高師助教授で同好附属幼稚園批判係を担当していた東基吉(1872～1958)は保育4項目の立場に立った「幼稚園保育法」(1904年)を著した。ほとんどの保育時間を「自然活動を十分満足せしめ」るような種々の遊技に当て、「恩物」中心から「遊戯」中心に移行していった。その後、東京女高師助教授として就任した和田実(1876～1954)と中村五六と「合著」で「幼児教育法」(1908年)を出版した。和田らは、保育全体を「習慣」の教育と「遊戯」の教育との二つの内容で、「習慣的教育法」を明らかにするとともに、「遊戯」の体系とその誘導的な教育方法を明らかにした。

1－2. 保育カリキュラム改革

倉橋惣三は、幼児の積み木遊びとして幼児たちにさせたかったとし、フレーベルの恩物を一つの籠にいれ、「積木玩具」として欲しいだけ使わせるようにしたことで、子ども達は、多種類の積み木を一度に数多く使えるようになり、積み木の面白さを倍増させるものであり、恩物の指導体系を大きく異なった。

J・デューイが娘のE・デューイと共同して書いた「明日の学校」(1915年)の中でコロンビア大学の附属幼稚園の実践を取り上げ、高く評価されていた。コロンビア大学に所属していたW・H・キルパトリックが、J・デューイの理論を学び、教育方法論としての論文「プロジェクト・メソッド(The Project Method)」(1918年)を発表した。

また、P・S・ヒルを中心として、J・デューイやキルパトリックに学んでカリキュラム研究が進められており「コンダクト・カリキュラム (A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade)」(1923 年) である。

こうして、倉橋は「一つの目的をたてて、其目的に向かって問題を解決していく。或いは、単に抽象的な問題を解決するばかりではなく、具体的解決、即ち製作というものをさせていく」¹⁰⁾

1923 年 (大正 12 年) には、乙竹岩造による「プロジェクト法と幼稚園の作業」の中でプロジェクト・メソッドは次のような特徴を挙げられている。

- ①近年、アメリカの教育界でさかんに唱導されているプロジェクト・メソッド法とは、教材すなわち題材を、一つの計画または構案の形で学習させようとするものである。
- ②幼稚園は保育の場であって、規則的な教授学習によるものではない。幼稚園は遊戯を主とするところがあるが、遊戯から作業へと進んでいくものである。しかし、それは、学校の作業とはちがひ、遊戯的作業である。
- ③遊戯的作業といっても、ただ、手当たり放題に子供を活動させればよいというものではなく、なんらかの教材や対象があり、計画構案の考えを取り入れた作業である。
- ④着眼点は、遊戯にせよ、作業にせよ、これを演じ、これを行う子供のその態度の上に、自らを計画し、自らこれを構案し、自ら工夫し、自ら処理をし、自ら解決を遂げては、さらに、また新しく自ら計画するということにある。
- ⑤この方法では、その手続きと範囲とは多種多様であって、無限に展開される。子供の興味は湧き出る泉のように、こんこんとして流れ尽きぬものになるであろう。

1-3. 系統的保育案の完成—誘導保育案を主軸とする保育カリキュラム

「系統的保育案」は東京女高師附属幼稚園編「系統的保育案の実例」(1935 年) に、倉橋惣三を中心とする東京女高師附属幼稚園の教師たちによる共同研究によって作成され、日本での保育カリキュラムの誕生であった。「系統的保育案」は幼児たちの生活を基盤とする保育案であり、倉橋は「先づ十分に自然な子供の生活形態を形づくらせて、それぞれの間に十分の自己充実が出来て行くようにしてやるのが要諦の第一だ」¹¹⁾

と明記している。また、「生活」という項目の中で「自由遊戯」と「生活訓練」に分けている。倉橋は、「自由遊戯」を幼児の生活は自由遊びから始まるのである。それは、保育の一部にとどまるものではなく、どこまでも「保育の基底」である。その遊び方の指導の一つは幼児の自発的な曾比に指導をあたえること、もう一つは自由遊びを誘導し、また、豊かにし、変化を与えることである。前者は、指導法であるが、後者は「一種の保育計画」である。保育者は常に、幼児の楽しむ遊び方の種類を多く用意し、幼児の年齢に応じ、季節に従い、

場面に即して、これを自在に用いることが出来なければならない。¹²⁾ としている。

「生活訓練」とは、「幼児の生活によき習慣をつけることである。」¹²⁾ 幼児の道徳訓練の全面にわたる要目をあげたもので、「生活訓練」のための時間や方法を設定して行おうとするものではないとしている。

「保育設定案」と「過程保育案」を含む「保育設定案」は「生活」とはことなり「方法的設定の性質」をもつものであり、「保育者の方から持ち出し、少なくとも持ちかけていく方法的予案である」これまでの保育案は学校の時間割のように「遊戯」「唱歌」「観察」「談話」「手技」といった保育 5 項目を配当羅列したようなものであり、いわば「過程保育案」だけの保育案であった。それに対して、新しい保育案は「生活」を基盤とするとともに、「誘導保育案」を「設定保育案」に加えることで「何とかして、生活形態にし、幼児の生活感情を活かしてゆくことはできないか」¹³⁾ と倉橋は考えたのである。

「誘導保育案」について倉橋は「子供が何の気もなく唯やって居ります自由遊びの中の各要素、主題と計画及び期待効果と云うものを、自然のまま以上にはっきりさしてきたものであるともいえます。ただ、そこで欠けているものは一定の継続時間で、之さえ指導されれば、それで立派な誘導保育案の特質が見えてくる」⁷⁾ ものである。

「過程保育案」とは、保育項目のそれぞれが誘導保育案の中にすべて導き入れられてしまうのではなく、独自にとりあげて指導する必要があるのではないかと考えられている。

倉橋が考えていた「系統的保育案」とは、「自由遊戯」「生活訓練」「誘導保育」「過程保育案」の項目がばらばらに展開されるのではなく一体として展開されることが望ましいとされていた。

しかし、倉橋らはこれに満足した分けではなく「各クラスの実例を材料とし、取捨を加え、配合を変え、一つの保育案として組み立てた」ものであり「現行のまま」でない。また全国を「将来を統一し、定型せんとする自縄のものではない」「園としてだいたい基準下に、各組は各自その保育計画を立てる」ものであって「年々変化されている」とされている。

矢野は、この「系統的保育案」はその中核に「誘導保育案」すなわちプロジェクト・メソッドによる保育活動を中核に置いた構造的カリキュラムとしている。しかも、「誘導保育案」の中に「保育項目」を取り入れることで近代的なカリキュラムになっている。しかし、「課程保育案」の中で「誘導保育案」に吸収されることに力点が置かれ、相互関連的な把握が弱く、「誘導保育案」の「主題」が「遊び」に限定されてしまったことが挙げられる。また、プロジェクト・メソッドが問題解決の方法であることへの認識が弱く、話し合い(相談)活動の重要性が方法論的に位置づけられている。また、集団活動の発達をカリキュラムの一つの軸とするには至らなかった。

2. 保育問題研究会

戦前の保育問題研究会の「社会協力」論を受け継ぎ、戦後の岸和子、海卓子、畑谷光代等の三つの保育実践などを背景としながら三木安正の「保育計画」が発刊された。

三木は、「私の幼児教育論」(フレーベル館 1973 年)の中で、カリキュラムの基本的な筋について「幼児教育のねらいを“幼児期におけるのぞましいパーソナリティの成形”というところにおき、それは、幼稚園・保育園の集団生活の指導を通じて行われるのだということから、まず子ども達が集団生活はいつたとき、どのような様相をしめすのか、そして、それに対してどのような指導をおこなうべきかということを考え、子ども達は豊かで正しい集団生活の場をつくらせ、集団にはいつていけないような子ども達は徐々に仲間に入れてやり、やがてはすべての子どもが集団の一員として自律的な行動がとれるように導き、そうした雰囲気の中で、望ましい人格を育てていこうということを大筋とした」¹⁴⁾カリキュラムの基本は子ども達の集団生活を通して「望ましいパーソナリティの成形」(ここでは「望ましい人格」の形成)を目指そうとしているものであった。また、城戸の「社会協力」論¹⁵⁾を受け継ぐものであり、カリキュラムの中核は「集団生活の発展」であり、「人間形成の場である「集団生活」を軸として、身近にふれてくる社会生活の流れにそったことからの中から適切な経験となるものを選んで、子どもが興味をもって展開してゆける遊びと仕事の生活を用意することが「保育計画」である」¹⁶⁾とうるものだった。この、保育計画が生まれた背景には無着成恭「山びこ学校」(1951)などの生活綴方教育では、幼児の言葉から幼児の考え方、感じ方を汲み取ることで「ありふれた経験を言語化する」実践を土台とし、「話し合い」保育(後につたえあい保育)の実践が展開された。「話し合い」から「行動」へ、そして「行動」から「話し合い」へと繰り返されるゆっくりとした取組が必要である。そうした、繰り返しが子ども達の認識をたしかなものにし、相互理解をすすめていくこととなり、一人ひとりがクラスを構成するものとして、どのように生活すればよいか分かるようになる。それは、子ども同士の人間関係が豊かなものにし、集団生活を発展させていくものとなると矢戸は言っている。

3. プロジェクト活動

日本におけるプロジェクト活動は、戦後、文部省「保育要領」(1948 年)のもと、戦前の保育 5 項目主義をのりこえるようなごっこ遊びが展開された。その後、6 領域が登場し、「幼稚園教育要領」(1956 年)は「自然」を 6 領域の中に位置づけた。その後、多くの実践がなされた。その中には、自然環境を通して、「なぜだろう」「やってみよう」という意欲を生み出し、共同の主題(テーマ)のもとに協同活動を展開していくきっかけをつくることや子どもたちの要求に根ざした主題・目標のもと協同活動が生まれる。また、保育の展開過程には、必ず保育者を含めた子どもたちの「話し合い」があるということである。子どもたちがアイディアを出し合い、

工夫、試行錯誤することで、子ども同士の「話し合い」を活性化させる。そうすることで、子ども達の集団思考力をきたえ、個々の子ども達の思考力を高めていくことになる。

子ども達の興味・関心・要求をもとに、グループやクラスが協力して取り組む活動—それが主題(課題)であり、「中心となる活動」であり、保育活動の「中心」に位置づけられている。また、その活動の中で「話し合い」は重要な鍵となっている。また「課業的活動」は「中心となる活動」を生み出す媒介項として大きな役割を果たす。しかし、それだけではなく、「課業的活動」は同時に「子どもの感応、表現の力を系統的に豊かにする活動」として位置づけられなければならない。

4. 和光幼稚園

和光学園における幼稚園、小学校の連携をとりあげて検討するものである。特に幼稚園におけるプロジェクト活動(総合活動)の状況と小学校への連携の在り方について考えた。

ここでは、プロジェクト活動は教師の意図によってスムーズに展開されるよりも「子どもと試行錯誤しながら自分たちの生活をきりひらいていく」ところに重点がおかれなければならないとするものである。子ども達と教師が「わくわく、どきどき」を共有する「試行錯誤」の実践であったということが分かる。

和光学園における幼稚園教育、小学校連携を大滝・行田・両角「そでたたいね、こんな学力—和光学園の一貫教育」から紹介する。和光幼稚園は二つの目標を大切にしている一つ目は「自分が夢中になれる世界で楽しさを実感する」(自然とかわり五感をはたらかせて楽しむ/ものをつくる楽しさと工夫するおもしろさを味わう/体を動かし、あそぶ楽しさを実感する/知的探求心をもち、自分で考えるおもしろさをひろげる)ことである。二つ目は「自分が受けとめられる安心感をもち、他者とのかわりを豊かにしていく」(実感ある本当の楽しさ、うれしさ、つらさ、悲しさを友達と共有する/友達は自分とはちがうからこそおもしろいと感じる/自分のことは自分で決める)ことである。教育活動では、生活文化の獲得、探索的・探求活動、文化共有活動、総合(プロジェクト)活動 5 歳児で構成されている。¹⁷⁾

和光小学校では五つの要素を大切にしており、幼稚園の連携を図っている。

VI. まとめ

本研究では、矢戸健夫による幼児教育分野で数々の研究の特徴を分野に分け、その中から、教育計画、保育計画、指導計画、評価に関する研究に着目し研究リストを作成すると共に、代表的研究を取り上げ、歴史的経過及び研究内容の比較をし、矢戸健夫が構築した保育カリキュラム論を整理し、保育内容総論における保育カリキュラム資源とすることを目的とした。

「保育カリキュラムについて考える」では、環境構成型、設定保育型に付け加えてプロジェクト型の3つの顔(型)を持っているが、そのどれかにとらわれようとするのではなく、保育カリキュラムの全体構造を構想しようとするものであった。

「保育構造論からみる保育計画」では、各活動が連動し合う保育活動であること、

「話し合いは」子どもの相互の理解を深め、活動を連動させる鍵であること、一人一人が集団生活の中で輝いていること、父母との連携を大切にすることが大切である。

「日本における保育カリキュラム」では倉橋惣三の保育カリキュラムである系統的保育案であり、課業中心型の保育カリキュラムだったが、その後、それを批判する多くの主張・理論や実践が生まれていった。

保育問題研究会と「保育案」の研究では保育問題研究会の「保育案」(保育カリキュラム)の研究で、保育活動は「子どもの自然である利己的生活を共同的生活へと指導していく」ものであるとし、その指導原理を「社会協力」としている。

プロジェクト活動では、日本におけるプロジェクト活動の実践を紹介している。

和光幼稚園では、「自由あそび」を「基底」に位置づけながら、中心過程(単元活動、中心になる活動)を主軸に捉えた問題可決的思考を育てる構造、統合的な教育カリキュラムであり、小学校との連携に着目した。

集団保育とカリキュラム研究では、戦前の保育問題研究会の「社会協力」論を受け継ぎ、戦後の岸和子、海卓子、畑谷光代らの保育実践を背景にしながら作成された三木安正著「年間保育計画」を取り上げている。

これらの矢野がまとめた歴史的変遷は、日本における明治から大正時代の保育の移り変わりをまとめている。また、倉橋惣三の保育カリキュラムでは、系統的保育案から誘導保育案に至るまでの経過が詳しく書かれている。

さらに、矢野が提案している保育カリキュラムには、常に子どもの発達を踏まえ問題可決的思考を育てる構造をもつ統合的なカリキュラムが大切だとされていた。その際、実践に基づく指導計画の分析や比較、さらに領域を超えた遊びのカリキュラムを提案されていた。

このことは、保育内容総論における各年齢における保育の考え方、計画に結びつく保育・幼児教育課程研究での到達点とも言える内容が点在していると考えられる。これらの視点を整理、まとめ、今後の課題である新たな保育内容総論構想の確立とし、以下に示す。

1. 保育・幼児教育課程研究の到達点を整理し、それを出発点として保育内容総論を構想する資料とする。
2. 保育指導法に関する先行研究を整理し、それを第2の資料とする。
3. 従来の「保育内容総論」という名前(類似を含む)の先行文献の内容を総括し、保育内容総論とは、いかなる目的と

内容の学科目なのかを整理する。

4. 教育課程と指導計画と保育内容総論の果たしうる役割について考究する。

5. 領域を超えた総合的な保育活動の指導及び内容や方法。

本研究における研究結果から、今後は保育指導法の整理、従来の「保育内容総論」の先行文献の分析、教育課程及び指導計画の役割の考究、領域を超えた総合的活動の指導及び内容をまとめ新たな保育内容総論構想試案を作成していきたい。

〈引用文献〉

- 1) 中央教育審議会(2017)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』答申
- 2) 柴崎政行・戸田雅美・増田まゆみ編(2010)『保育過程・教育課程総論』pp iii～x
- 3) 及川留美、善本眞美、寒河江芳枝、伊瀬玲奈(著) 福岡淳子、山本恵子(編)(2013)『エピソードから楽しく学ぶ保育内容総論』創成社、pp V—VII
- 4) 矢野健夫(2010)『保育カリキュラム(保育課程)について考える—保育カリキュラムの構想—』、保育の研究 23号 pp1—8
- 5) イングリッド・エングダール(2009)『スウェーデンの就学前教育におけるナショナルカリキュラムの実施』白石淑江著「スウェーデン保育から幼児教育へ」かもがわ出版、p180
- 6) 同上 pp181—182
- 7) 矢野健夫(2016)『季刊保育問題研究(277)』全国保育問題研究協議会編集委員会、親読書社
- 8) 矢野健夫(2017)『日本における保育カリキュラム歴史と課題』、親読書社
- 9) 浦辺・矢野・村山編(1981)『保育の歴史』p. 12
- 10) 倉橋惣三(1923)『幼稚園から小学校へ—幼稚園と小学校幼年級の真の聯結』『幼児教育』第23巻第4号、
- 11) 倉橋惣三(1934)『幼稚園保育法真諦』東洋図書、pp. 22
- 12) 矢野健夫(2017)『日本における保育カリキュラム歴史と課題』、親読書社、p. 47
- 13) 矢野健夫(2017)『日本における保育カリキュラム歴史と課題』、親読書社、p. 48
- 14) 三木安正(1973)『私の幼児教育論』フレーベル館、p. 100
- 15) 矢野健夫(2017)『日本における保育カリキュラム歴史と課題』、親読書社、pp. 80—81
- 16) 三木安正(1959)『年間保育計画』フレーベル館、p29
- 17) 大滝三雄、行田稔彦、両角憲一共著(2009)『育てたいね、こんな学力—和光学園一貫教育』大月書店、pp19—20

〈参考文献〉

- ・太田 悦生(2008)『新・保育内容総論』(株)みらい

- ・小笠原圭、植田明（2003）『保育の計画と方法』同文書院
- ・亀谷和史、穴戸健夫、丹羽孝（2006）『現代保育論』かもがわ出版